

一四六 上五

「そのうち年が暮れて春になりました。」

[35]

上三

Kとお嬢さんが一緒にいるのを見たのは、十一月中下旬である。約一ヶ月半くらいその時から過ぎている。もやもやしたままかなりの時間が経ったということになる。いらいらするのをも度を超してくる？

「私もあいにくそんな陽気な遊びをする心持ちになれないので、いい加減な生返事をしたなり、うちやっておきました。」

十月中旬からお嬢さんの曖昧な態度が続き、約二ヶ月過ぎてしまった。

正月になっても、陽気な気分になれない。時間が経っても変化が見られない。お嬢さんの態度も変化していかないと思われる。

下三

「私はKにいったい百人一首の歌を知っているのかと尋ねました。」

下五

Kのことをよく知っているから、百人一首を知らないのはよく知っているはずである。それをお嬢さんに分からせる。文学のことや、恋のことなど知らないということをお嬢さんに知らせたかった？

「それから目立つようにKの加勢をし出しました。しまいには二人がほとんど組になつて私に当たるといふ有様になってきました。」

お嬢さんの態度はここ数ヶ月間、Kにべつたりの状態である。そのため私もカルタ取りをする気がなかったのだが、無理矢理引っぱり出されて気が進まないのに、お嬢さんはさらにKにべつたりの態度をとる。

下九

「私は相手次第ではけんかを始めたかもしれないのです。」

「相手次第」……どんな相手だったらけんかをするか？

お嬢さんと組になれて、浮かれた態度をする男。

お嬢さんのことが好きだと公言している男。

私に挑発的に対抗意識を燃やす男。

「けんかを始めた」

お嬢さんのことに関しては、こんな些細なことでもけんかをしそふになる。二ヶ月前よりも切迫感がある。

下〇

「幸いにKの態度は少しも最初と変わりませんでした。彼のどこにも得意らしい様子を認めなかった私は、」

お嬢さんと組になつて

・うれしくない 女性に興味がない。恋愛感情がわからない。

・うれしい お嬢さんのことが好きである。

得意らしい様子を認めなかった

・うれしくないから得意な顔にならない。

・うれしくて、得意な顔にならない。

得意な顔をしないようにした。

自分に敵しい。へらへらしたくない。

得意な顔ができない。(内面を表せない。)

「十一月の寒い雨の降る日のことでした。私は外套を濡らして例のとおり……」 [33]

下三

「それから二、三日たった後のことでしたらう、」

下二六	<p>「私は書物を読むのも散歩に出るのもいやだったので、 かるた取り事件から二、三日。 私はそんなに学問が嫌いではないはずであるが、本を読むのも嫌 になっっている。かるた取り事件でシヨックがまた大きくなっ ている。」</p>
一四七 上七	<p>「Kは不意に仕切りのふすまを開けて私と顔を見合わせました。」 声もかけずにふすまを開けた。Kは思いこんだら、すかさず実 行に起こす。私に対する礼儀もない。 それまでが静かであったので、Kはお嬢さんとのことを考えてい たのだろう。よくよく考えて、煮詰まったから、突然非礼にふすま を開けたか？ 挨拶もしないで開けるほど、お嬢さんの念にとらわれている。 自分を自分でコントロールできない。(平生のKではない。) かるたでの出来事が契機となって、お嬢さんのことを好きになっ た。彼は敷居の上に立つたまま、私に何を考えていると聞きました。」</p>
上八	<p>「何を考えている」という発言は考えてみれば、おかしなもの ある。 ・Kはお嬢さんのことを考えていた。お嬢さんのことを考える と苦しくなる。ずつつとこのことが頭から離れない。一人で ずつつと静かに考えている。そついえは隣にいるはずの私も静 かである。私も何か考えているのか？「何を考えている」 自分に考え事があるから出てきた発言である。 とりたてて私が考えていることを聞こうとしたわけではない。」</p>
下 一	<p>「するとKのほうからつかつかと私の座敷へ入ってきて、私のあたって いる火鉢の前に座りました。」 図々しい感じがする。 こうと思ったら突っ走ってしまうKの姿。 自己本位 私の都合は無視している。</p>
下 五	<p>「Kはいつもに似合わない話を始めました。」 いつもは難しい学問や、道の話をしている。</p>
[36]	
一四七 下二五	<p>「Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話をやめませんでした。」 私はやめてほしいと考えている。Kがお嬢さんの話をするのはお かしいし、Kにはお嬢さんの話だけはしてもらいたくない。 「彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられ たときの私を想像してみてください。」</p>
一四八 上 五	<p>「重々しい口から」「恋を打ち明けられた」 ・Kの言葉には重みがある。Kの言葉は私に響く。 ・一番危ぶみ、一番聞きたくなかった内容の言葉である。 普段のKならよけいな ことはいわないのだから、 が、この時は平生と違っ ているわけだから、いつ もにない発言が始まる。 自己本位 寡黙なKが野別幕無し 話している。思いが強い ことが分かる。 「切ない恋」と感じた のは、私である。 本当に切ないかどうか は分からないはず。 Kのことだから「切な い」と思ったのか？ 自分が「切ない」か ら？</p>

下二	<p>「私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。」</p> <p>「魔法棒」……とてつもない力を出すもの。Kの言葉が自分に強い影響力を与える。</p> <p>普通の人には堪える力がない。</p> <p>想像も付かない力。今までのKはよく知っているから、想像がつかないということはない。</p>	<p>精進一筋であったK。恋の話をしているから全く別人のようである。変身したようである。</p>
下三	<p>「化石された」……身も心も動けなくなった。</p> <p>自分の恋は終わりになってしまつたのではないか？</p> <p>Kに対して言い返せる言葉がない。</p> <p>「口をもぐもぐさせる働きさえ、私にはなくなってしまったのです。」</p> <p>「口をもぐもぐさせる」……Kがよくする行為。</p> <p>言葉を選ぶこともできなくなった。</p> <p>言い返す気も起きなかった。</p>	<p>Kが言葉を選んでいるときに見せる。</p>
一四八 下五	<p>「その時の私は恐ろしさの塊といましようか、または苦しさの塊といましようか、何しろ一つの塊でした。石か鉄のように頭から足の先まで急に堅くなったのです。」</p> <p>「恐ろしさ」……自分に危害を加える。お嬢さんを奪ってしまふ。</p> <p>突然自分に襲いかかってくるものへの恐怖。(対処できない。)</p> <p>「苦しさ」……言い返すことができない苦しさ。</p> <p>Kに絶えず圧倒されている苦しさ。</p> <p>「塊」……手も足も出ない状態。為すべがない。思考能力がなくなっている。</p> <p>「石か鉄のように」……無機物。無生物。動きもしないし、考えもできない。</p>	
下二〇	<p>「私は一瞬間の後に、また人間らしい気分を取り戻しました。」</p> <p>「一瞬間の後に」……突然来た恐怖は、慣れればそうでもなくなる。</p> <p>「人間らしい気分」……思考できるようになった。現在の状況を把握できる状態。</p>	
下二一	<p>「そうして、すぐしまったと思いました。先を越されたなと思いました。」</p> <p>現在の自分の状況を把握。</p> <p>先に行動に出されてしまった。</p> <p>行動に出すほどKの想いはついていた。(私が行動に出そうと思つて途中でやめたのと比較する。)</p>	
下二三	<p>「しかしその先をどうしようという分別はまるで起こりません。」</p> <p>恐怖が続いている。Kへの恐怖で分別がなくなっている。</p>	
下二六	<p>「Kはその間いつものとおり重い口を切つては、ぼつりぼつりと自分の心を打ち明けていきます。」</p>	<p>Kの台詞が全く載っていない。</p> <p>「化石された」ので覚えていない。</p> <p>ショックの強さ。</p>

上
八

「重くて鈍い代わりに、とても容易なことでは動かせないという感じを私に与えたのです。」

「重い口」「ぼつりぼつり」……動かすことのできないKの気持ち。

「いくらKでもそこに気がつかないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分のことのために一切を集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったのでしょう。」

伏し目がちに話していた？

周りを省みることができない。

私の態度はお構いなしに話す。

思いの強さ。

上
四

「時には一種の恐ろしさを感じるようになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が兆し始めたのです。」

「恐ろしさ」「……相手の「強さ」に対する恐ろしさ。」

「強い」……お嬢さんの思いが強い。Kと対決しても、Kの気持ちは動かせない。(負けてしまう。)

恋愛においても、何においてもKは強く感じる。どうすることもできない。

「兆し始めた」……それからKに対してずうっと恐怖の念がある。

下
五

「ただ何事も言えなかったのです。また言う気にもならなかったのです。」

Kに圧倒された。

言い返す言葉が見つからなかった。何を言ってもだめだと思っ
た。
何をしてもだめだという「恐怖」により、無力感を持った。

Kの性格から言って、
これはないか？
自己本位